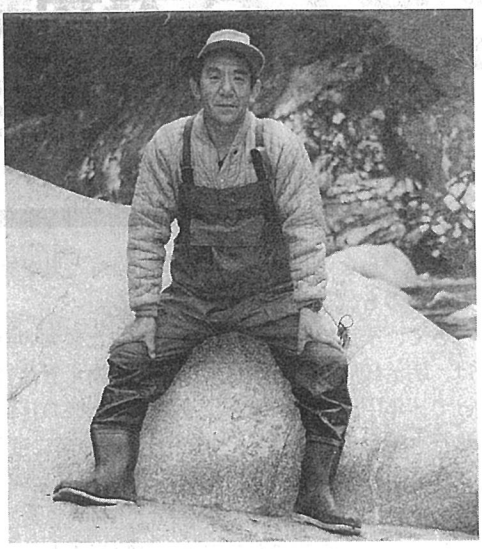
[……幻のビッグサイズを求めて……]



Yutaka Kato 加藤 豊

●有限会社海部清掃 代表取締役

血液型／O型
好きな言葉／信頼

釣り好きが高じて、ついには竿まで手作りしてしまうという加藤さん。手のこんだ作品は、素人の域を脱した秀作ばかり。渓流釣りは、釣り本来の楽しみだけではなく、完全防備の釣り人しか入り込めない、山奥での山菜とりが醍醐味とおっしゃいます。加藤さんの豊富な山の知識に、花井さんも驚きのインタビューです。

◆◆◆

退屈しのぎがハマっちゃって

———お話を伺う前から、何か“キャリア”みたいなものを感じます。いつ頃からのご趣味ですか？

加藤　20年くらい前かなぁ‥‥。最初は面白半分の退屈しのぎだね。それがハマっちゃった（笑）。釣りっていうのはね、好きな方はみんなご存知だと思うけど、「朝・夕」なんだね。海へはいれば潮の満ち引きがあるわけだけど、それ以外の時間を自然とたわむれてる。それが楽しいわけだね。

たとえば今の冬の時期、都会では見られない山水の中で自然を堪能する。これには釣り以外の醍醐味があるね。

———それもたまらないわけですね。

加藤　そうそう。春もいいよ。山菜をはじめとした山の恵みが実にたくさんありますわ。それもね、釣りでなければいけない場所。われわれは完全装備して行くわけでしょ。その装備があって初めて行ける場所がある。一番早いのは蕗の薹、せり、こごみからはじまって、ぜんまい、わらび、タラの芽、そして山ぶきが出てきますわ。そのへんのスーパーで買えば、確かに楽に手に入ります。でもね、人間の味覚、それに伴う幸せの真髄みたいなものは、自分が苦労して新鮮な自然の恵みを手に入れて味わう。それが一番嬉しくて美味しい。そんな気がするね。人からもらったり買ったりするどんな高価なものよりも、最も喜びのあるものじゃないですかね。

———ふつうでは味わえない喜びだから、自然を残していく大切さも人一倍お感じになるんじゃないですか。

加藤　それはありますね。私は釣りを通していろんな喜びを知りましたね。

渓流釣りっていうのは、一人では行けないんです。ふつうの渓流と違って本流へ行くわけですから沢を登って3時間、4時間と奥へ入って行くでしょ。何か

あった時に一人ではどうしようもない。たいていは二人か三人で登っていく。谷があり崖がある。そういう危険と隣り合わせで夢とロマンを求めて行くわけです。

———夢とロマン。何か“男の世界”ですねぇ。

加藤　ま、そういう楽しみを知ってしまったということです。そういうとこへ行くと、ふだん食べないものも食べられる。それしか食べるものがないからね（笑）。缶詰、ソーセージ、インスタントね。湯を沸かして缶ビール飲んで、しゃべって、さぁまた行こか。その時の気持ち、雰囲気、それは子供の時のままだね。

———そうした童心に帰るってことも、経営をなさってると日々忙しくて中々できませんよね。それもまたぜいたく。

加藤　そうです　そうです。大げさに言えば、仕事のことも家庭のことも、なーんにもないわけですわ。一緒に行った仲間とだけの、その時だけを楽しむガキの世界です。それを味わったものはもう‥‥これが“ハマった”ということですね。ウチの奴も、最初はボヤいてましたが、今は諦めてますわ（笑）。

———（そばで笑ってる奥さんを見て）ホントはそうでもないんじゃないですか（笑）。一年中、なんですか？

加藤　渓流は2月から始まって9月に終わるんです。

私は2月から6月頃かなぁ。それからあとは、我々が行くようなとこはいろんなものが出てくる。一番恐いのはマムシだね。4月は気温が低くてまだマムシも動かないけど、5月、6月の入梅時は危ない。

———完全装備でもですか？

加藤　手なんですよ、沢登りというのは。岩の間に手をかけながら登っていく。足だけじゃとても登れないんですよ。手をかける、たまたまそういうとこにマムシがいたら、マムシだって咄嗟のことだから、びっくりして噛みつきますわね。それが、一番おっかないわけです。

———渓流というか、山はおもにどちらの地方へ行かれるんですか。

加藤　長野が多いね。午前中に仕事の段取りを済ませて、夕方着くようにするわけです。食糧仕入れて、連れと一緒に食べて、酒汲み交わして、だいたい車のなかで寝ちゃう。すると夜中に目が二つ光ってる。まぁタヌキだね（笑）。

———あんまり身近で見たことはないんですが、タヌキって“こわい”って感じじゃないですね。どちらかというとユーモラス？

加藤　そうそう。キツネはすばしっこいけどタヌキはドタドタしてる。一度面白いことが

あってね。夜、あんまり釣れないんで沢を潜ろうということになって、崖道を運転してた。その道にたまたまタヌキがいてね。ヘッドライト当たってびっくりしてるんだけど片方は崖、片方は登れないわけですよ。タヌキは1kmくらい車の前をドタドタ、ドタドタ、走ってましたわ（笑）。

———か、かわいそうですねぇ……。乗せてあげれば良かったのに（笑）。

加藤　いや我々も心得てね、ゆっくり走ってましたよ。こういう話しはいっぱいあります。

◆◆◆

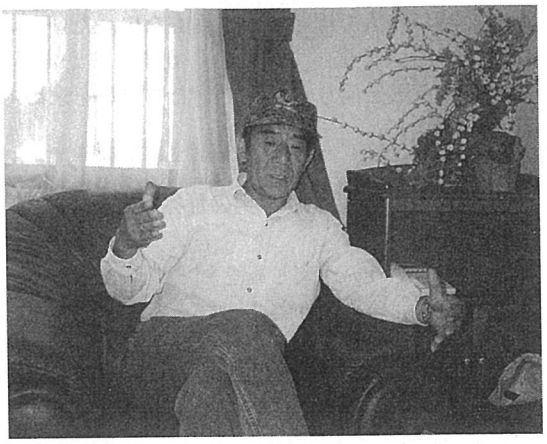
釣りは魚との知恵比べ

———で、渓流ですが。

加藤　うーん、渓流ねぇ。たった一匹のね、ビッグサイズ。30センチ、50センチの岩魚。めったにお目にかかれない、そのビッグサイズを求めて行くわけですよ。たいていは15センチくらいかな‥‥。ウチで食べるわけじゃない。でもね、行って来た証拠がないとね、これはねぇ、何しろ前科のある身だからねぇ‥‥（奥さん、事務局の所さん大笑い）。

（所さん）しかし、渓流のそんな上の方まで魚っているもんかねぇ。

加藤　いますよ。今頃だとね、上の方は水が切れてる。その切れてるところの5センチくらいの深さの水溜まりに40センチくらいの岩魚がいるんです。岩魚っていうのはね、鮭科の魚でしょ。鮭と同じような習性を持ってますから、自分が卵を産みつける水のあるところには必死で登ってくる。私には信じがたいんだけど、本当の釣り師と言われるような人の中には岩魚はひと山越えるって言うからね。それくらいの生命力で登るんだね。岩魚



は下るっていうことを知らない。岩魚が下がるのはね、春先に水が出た時に流されるんです。流されてまた登る。

———鮎はどうなんですか？

加藤　鮎も同じような習性持ってます。それで鮎はね、流されないように、自分の胃の中に石ころ詰めるんですわ。春先の水の多い時に行くとね、釣れない。80パーセント釣れない。石の下にかくれてて、エサを食おうとしない。エサを食おうという力より、流されまいとふんばる、その力の方が強いんだね。

———自然の力と本能の力が、必死に闘ってるんですねぇ。そこへ釣り人のロマンがはいってくる。ビッグサイズにはいつ出逢えるんでしょう。

加藤　ある時期になると水が切れる。水溜まりができる。完全な水溜まりになると魚が絶えるから、湧き水がそこへ流れてます。そこに何らかが、つまり大きな木とか岩とか、そういうものがあったら、そこに私らの幻の魚がいる。でもね、まずかかっても釣れない。彼らも必死ですからね、木の中へはいりますわ。そうするともう取り込みができない。

———そんなスゴい力ですか。一匹の魚、一匹の岩魚が———。

加藤　力そのものより、釣りは魚との知恵比べでしょ。ものすごく細い糸を使ってるわけです。だから手元へ引く前に糸が切れちゃう。だからといって、太い糸使えば、魚にバカヤロウって言われちゃう。

——その魚とのやりとりの新シーズンが近づいて来ますね。

加藤　2月1日が解禁だね。渓流をやる何百人という釣り人が一斉に川にはいるわね。そういう日は私はちょっとずらすんです。ケンカ腰になっちゃうんだね、みんな釣りたい釣りたいで。私だってもちろん釣りたいけど、釣るだけが目的じゃない。たった一匹のビッグサイズ。これを求めて沢にはいって、一日は温泉につかるもよし、山菜採るのもよし。

——達人のお言葉ですね（笑）。

加藤　いやいや（笑）。でもね、都会では学べない自然のルールみたいなもの、これは本当に難しいね。これは登るという沢があれば、これははいってはいかんという沢がある。去年は登れたところが今年は登れない。

——それは自然の変化ですか。

加藤　そうなんです。その年の雪などの気象条件もありますね。雪解けの変化で、去年は手をかけて登れた木の根がゆるんでる。岩の地盤もゆるんでる。無理して登れば岩と一緒に自分も落ちてくだけです。そういう判断がつくようになって来た。自分を守るために無理をしない。これは大切なことです。その向こうにいるビッグサイズにもう胸はときめいてるんですけどね（笑）。それと年々無理がきかなくなってる自分の体も考えなくてはいけませんしね。

——そうおっしゃりながら、ご自慢の手作りの竿。どれも年季のはいった職人さんのできばえのように私には見えます。

加藤　これはね、廃品利用、リサイクルの部分もあってね。廃品の竿っていうのが結構出るんです。そうした竿の気に入ったパーツをはずしたり、握りのところに棕櫚を巻いたりして、自分のサイズのものを作ってくんです。これもなかなか面白い。何にしてもね“ハマった”ことをやってる時が倖せです。体の調子もいいです。

——健康のためにも、これからもビッグサイズと自然の楽しみを追っかけて下さい。“証拠物件”もお忘れにならないように（笑）。

INTERVIEWER
花井　美紀
（株）コミュニケーションデザイン代表
イベント司会・コーディネイター、
ビジネスマナーインストラクター、
信用金庫協会女子職員講座の専任講師。
TV、ラジオ等で現在活躍中。